

平成30年度第1回大学リーグやまぐち代表者会議 議事録

日 時：平成30年7月31日（火） 11時～12時

場 所：県庁4階 共用第1会議室

議 事

○平成29年度事業報告及び決算（案）

→ 事務局から資料を基に平成29年度事業報告及び決算案について説明があり異議なく承認された。

■意見交換

①テーマ

大学リーグやまぐちの在り方等（村岡特別顧問より）

②概 要

◇ 村岡特別顧問

「大学リーグやまぐち」においては、これまでも様々な取組を進められているが、その中でも、県内高校生等の県内進学、県内就職に係る取組について期待する。

現在、県では、新しい総合計画である「やまぐち維新プラン」を作成中で、秋の完成を目指しているところであるが、この計画では、「大学リーグやまぐち」と連携し、若者の県内定着を推進することについて掲げさせてもらっている。

引き続き「大学リーグやまぐち」と連携・協働し、実効ある若者の県内定着に係る取組を促していきたい。

進路の選択に当たっては、学生の志向や社会経済情勢、保護者の意向等、様々な要因が考えられる。

これまでの取組の結果も踏まえ、今後、「大学リーグやまぐち」が行う県内進学や県内就職のための効果的な取組や、今後の「大学リーグやまぐち」の在り方や方向性等について委員の皆さんの意見を伺いたい。

また、先ほど、今年度の事業計画の取組について説明があったが、その中でも、地域や企業等との連携促進の仕組みづくりについては、大変重要と考えており、県内の大学と地域、企業が連携して、様々な地域課題を解決するといった取組が増えていけばよいと考えている。

また、この取組を通じて、学生が企業や地域と関わりをもつことで、企業、地域等への関心が高まり、将来的には、若者の県内定着につながることを期待している。

各大学がもつ「強み」などを、企業や地域、山口県全体の活性化や様々な課題の解決にむすびつけていただきたい。大学シーズの確認などもこれから進めていくとのことであるが、是非、この仕組みがしっかりと機能して、各大学の役割が強まることにより、県内進学や県内就職の促進につながっていくことを期待する。

◇ 岩国短期大学（寺嶋学長）

岩国市は、広島県との県境にあり、経済圏は広島県であることから、山口県東部の多くの高校生が広島県に進学をしていく状況にある。このような中で、県内進学、県内就職と言っても、なかなか難しい問題ではあるが、小規模校であるということをメリットと捉え、きめ細かな教育を実践している。

となりの大竹市の大竹高校とは、県境をまたいでの高大連携協定を締結しており、教員による出前授業や大竹高校生のインターンシップの受け入れ、年2回の連携推進会議を実施している。

岩国短期大学は、幼児教育単科の短大であるため、今年度から「保育者の魅力発信プロジェクト」を学内に立ち上げ、その取り組みの第1弾として、小冊子を作成したところである。現在は、深刻な保育士不足と言われており、例えば、地方にある保育者の養成校が、学生が減って経営が成り立っていかなくなると、幼稚園・保育園で人材が確保できなくなるということも、各協会の会長さんに主旨を伝え、園長会等を通じて、保育士不足問題解決のためのお話をさせていただきたいとお願いしている。職場体験・インターンシップ等で、園を訪ねた中学生・高校生に、保育士になるためにはどうしたらいいのかということも冊子の中に書いてあるので、「是非保育士を目指してほしい、なるためにはこういった方法がある」と伝えて欲しい。冊子には一応、本学の名前が入ってはいるが、学校を宣伝する文章は一言も入っていない。

一例で言うと、職場体験に行くときには爪を切りましょうとか、髪を結びましょうといった細かいところから、日ごろどんな勉強をしたらよいかといったことが書いてある。

私どものような小規模な短大にあっては、地域と一体となった募集をしていくということが大切と考えている。現在、岩国市長にも客員教授になっていただき、年2回授業をしていただいている。岩国市、幼稚園協会、保育協会と一体となった学生募集活動を展開していこうというのが、大きな目標であり、県境ということもあり、広島県の西部からも学生を集めていきたいということで活動しているところである。例えば、先ほど企業との連携というお話があったが、企業にインターンシップで高校生が訪ねてくると、この会社に就職するには、〇〇大学の〇〇学部に行ったらいいよといった、もう少し具体的な連携をしたらどうかということも考えられる。大きな地区も小さな地区もあるかと思うが、地域の皆さんを巻き込んで学生の募集活動をしていくというのが、私学の生き残りの1つと思う。

◇ 東亜大学（櫛田学長）

県庁1階にある展示ブースがすばらしい。

県の方針等が非常に分かりやすく掲げられている。地域の特色を生かしたビジョンが提示されている。

大学は特色をもって教育を展開しているところであるが、特に、私立大学は建学の理念を掲げており、物事を決めていく上では、この理念に立ち戻る。地域においてどのように強みを生かしていくか、あるいは、弱みを補っていくかについては、常に寄って立つ、立ち戻って考える根本のものがある。

これを踏まえつつ、大きな流れに沿って各大学が持っているものを生かすことができれば、高等教育機関の更なる振興につながると考える。

これまでも県の支援に対して、様々なかたちで、一致して進めていくということであるが、ただ沿っていくのではなく、各大学が、県の方針に対して、何ができるのかということ、積極的に打ち出して取り組んでいくということが必要であり、課せられた課題ではないかと考える。

◇ 宇部フロンティア大学（長坂学長）

県内進学と県内就職についてお話しする。

この4月に県立大学から私立大学に移ったところであるが、従来、2018年問題と言われてきたことに、今まさに直面している状況にあり、定員をどう確保するかということに、非常に難しさを感じているところである。

大学が取り組むこととして、3つ方法がある。1つは魅力をしっかり創造すること、1つは不特定多数に向けた情報の発信、そして私立大学では個別のリクルートである。現在、この3つの柱で取り組んでいる。

まず、魅力の創造については、これは大学の自助努力によるものであるが、とにかく、現在、大学に来ている学生をしっかりと大事にして、満足度を上げていくということ、特別何か花火を打ち上げるということではないが、口コミ情報としてこの大学に入学して良かったと思ってもらうことが、大学のブランドを高めていくということにつながり、少し時間がかかるかもしれないが重要なことではないかと考えている。

次に、情報発信については、この「大学リーグやまぐち」で行っているオープンキャンパスマップや県内進学ガイドブックがある他、新聞記事で特集を組んでいただいたり、また、NHKでは「Go To Campas」という番組もある。様々なかたちでメディアに露出しており、この部分では成果があると感じている。

個別のリクルート活動で言うと、地方の小規模の大学では、たくさんの人を集めるという戦略よりも、一人ずつ、10人単位で集めていく。10人志願者が増えるか減るかということが生命線となっている。

そういう場としては、オープンキャンパスがあるが、その他に、出前授業として各種ガイダンスに出向き、ここでも個人的に繋がりをつけ、一人ずつ獲得していく取り組みが大事であると考えている。

各大学単独の取組には限界がある。高校と大学との出会いの場ということで、魅力発信フェアという大きなイベントはあるが、大きなイベントだけではなく、例えば、大学生と高校生の出会う『カタリ場』というのがあるが、それに加えて、高大接続ということで、大学の教職員と高校の教員の交流を行う、そうすると、高校の教員を通して、高校生にいろいろな情報が伝わるのではないかと考えている。

このような目的や対象を絞った小規模な取組というものも、この「大学リーグやまぐち」で企画していくというのがあれば良いと思われる。

県内就職については、学生の志向には、大手志向というものがあるが、もう一つ重要なことが、就職活動をする際に、全国の大手の就職情報サイトを利用する学生が多くなってきている。非常に動きが早く、県内の企業が対応できていない現状があるかと思われる。学生の動きを見ても、当初は県内の企業を希望していても、それだけでは不安であることから、県内と県外ということで、掛け持ちで行った時に、全国版の方で先に内定が出てしまう現状がある。そうすると、学生として、追い立てられてしまう気持ちになる。

県内のJ o bフェア等で情報提供は様々な場で行われることは承知しているが何か県内の情報サイトを一本化できるような、学生がここを見れば全部分かるというような、県内の就職サイトを包括できるようなものをC O Cプラスの遺産として残していただくことを期待している。

県内就職のきっかけとしては、インターンシップがあるが、これまでは、長期化や問題解決型で進めるといった動きがあったが、実際にやってみると、企業にとっても、学生にとってもかなり負担になっている面もある。学生にも準備が必要である。インターンシップ推進協議会においては、少しバラエティあるメニューを用意しているため、こういったところと更に連携を強化し、インターンシップにおいても学生の準備状況に応じたメニューを提供できる仕組みがあってもよいと思う。

最後に、地域・企業との連携促進について、これは是非進めていただきたい。特に、学生の地域活動を支援する仕組みになることを期待する。また、各大学においては、地域貢献をする部署、窓口は置いてあるが、小規模な大学であると、十分な人の配置等が困難な状況であるため、コーディネート機能については、単にマッチングということではなく、活動支援として、やり方を指導するなど、少し踏み込んだコーディネート機能があるとよいと考える。

地域貢献として出ていく教員も限られている。これまで地域に出ていくといった経験のない教員に対して支援するような仕組みもあるとよい。

◇ 岡会長

様々な御提案をいただいた。事務局から何かありますか。

◇ 事務局

今、地域・企業と大学の連携については、今年度、試行的に進めているところであり、是非、皆様方から御意見を伺っているところであり、こういった意見を参考としながら、また、どうしたらこういった活動を広げていけるのかということも検討していきたい。

◇ 岡会長

県内企業の魅力発見フェアを毎年行っているところ。

今年は11月3日に、維新百年記念公園のアリーナで行うが、県内企業だけが出展し、山口大学の学生も、1、2年生が参加する。1年生の時から、このようなイベントに参加してもらい、県内企業をできるだけ多く知ってもらうということが必要と感じる。企業を知らない学生が本当に多い。

このイベントは、山口大学のみが行っているものではなく、皆さんと一緒になって行っているものである。他の大学等の学生、教職員も参加することは可能であるため、参加していただきたい。

昨年度は、学生が1,300名参加した。徳山大学さんや県立大学さんは来られていたが、残念ながら、他のところは距離的な問題もあるかもしれないが、参加が十分ではない状況にある。

折角の機会であり、企業も最低70社くらいは展示する。70と言うと、県内の有力企業はほとんど網羅できていると思う。

こういった機会を、是非、使っていただきたい。3年生からでは、少し遅いと感じる。

◇ 徳山大学（岡野学長）

「大学リーグやまぐち」における取組は、我々としても非常に助かる。

オープンキャンスマップについては、先ほど説明があり、非常にありがたい取組ではあるが、これは第1歩である。

要するに、県内でどのようなオープンキャンパスがあるかということ、県内の高校に知らせる一つのツールとして重要であるが、大事なのは、やはりどれくらいの学生がそれを見ているか、それを見て、実際にそれに基づいて、県内大学等のオープンキャンパスに参加するようになるかという、そのところの仕組みというか、そういったところがもう一つ必要ではないかと考える。ただ単に高校に配布するだけでなく、それを実際に高校の先生が、高校の先生も山口県人であるわけであるから、山口県を活性化するためには、このオープンキャンスマップを活用して、県内の大学を見て回り、県内に残留するという方向にもっていただくような、全体的な雰囲気づくりがないと効果は出てこないと思う。そのところを次にこういった形で進めたらいいかということを進めていただきたい。

もう一つ、SNSによる県内大学の魅力発信は非常に重要なことだと思う。県内に限らず高校生はSNSに注目していることから、彼らが常にこのSNS

Sを見ながらオープンキャンスマップの情報などが入っていて、それを介して県内のオープンキャンパスに行ってみようかということになるような、そういった仕組みを、是非、もう一つ一緒に考えていきたい。

関連して、先ほどカタリ場について話があったが、高校生と大学生の交流を通して、高校生が県内に残ろうかという気持ちにさせるというもので、これまで行ってきた取組の中で、私は非常に評価している取組であるが、これも更にもう一步進めていただければと考えている。

県内就職は大事なことであるが、その前に県内大学に在学している学生の県内出身率が、3割にしかなくなっていないここを、4割、5割にしていけない限りは、山口県の活性化はないのではと考えている。

◇ 至誠館大学（野村学長）

私どもの大学は、特殊な、小規模な大学であり、現在、千人近い学生がいるが、そのうちの約8割が留学生で、東京サテライトということで、県外である。今年の入学生は308名で、そのうちの大半は東京サテライトであるが、この萩本部での入学が70名弱となっている。何とか県内を拡大しようと、現在、県内高校等を回っている。

本大学の地理条件というものは、下関から鳥取県の倉吉まで、私立4大がゼロといった状況にある。そういった意味で私立4大、地域の火を消すなどということで頑張っている。現在は、九州や中・四国といったところから学生が来てくれているが、卒業の際は、すべてふるさとに帰っていく。

県内就職等について、私もこれから頑張っていきたい。先ほど、徳山大学さんからお話しがあったように、進学に係る最後の決め手というのは、やはり先生であり、高校の先生に、各大学について理解をいただく必要がある。

本学のように、地理的条件の悪いところでは、商工会議所など、出口の方がまだまだの状況である。しかしながら、人手不足であるといった声はよく聞く。

◇ 岡会長

冒頭申したように、県の若者が減っているという状況は、我々、高等教育機関においても由々しき出来事である。

皆さんがおっしゃったように、自ら地元大学への進学率を上げるというのは当然であり、そのためにも我々も研究し、大学等の魅力を高校生等に伝えなければならない。委員の皆様にも、しっかりと認識していただきたい。

本学では、この度、高校との協議会をいくつか始めようということで、大学入試も変わるし、地元の進学率ということもあることから、こういうことを始めてみようと思う。情報については、また改めて御提示し、共に取り組めればとも考えている。

大学リーグやまぐちへの期待も大きいものであることから、皆さんと協力して運営できればと思っている。